

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

## 大学間連携イベント 「国際協力ボランティアを知ろう」実施報告書

2017年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター



## はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、紛争終結国等における平和構築と開発に関する調査、教育、実践を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創生」事業を平成 22（2010）年度から実施しております。本冊子は、この事業の一環として 2017 年 2 月 16 日－17 日に実施した大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」の実施記録と参加学生による報告を取りまとめたものです。

お茶の水女子大学、及び、奈良女子大学の 2 校から参加した学生は独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松青年海外協力隊訓練所において、アジア・アフリカの途上国へ派遣予定の訓練生の方々との交流や、2 年間の任期を終えて帰国された元ボランティアの方々の体験を直接伺う機会を持ちました。70 日間におよぶ訓練の一部を体験し、元協力隊員や訓練生の方々と直接言葉を交わすことによって、国際協力やボランティアについての理解を深め身近に感じる貴重な機会をもつことができました。

福島県浪江町で障害者の方々の就労と自立支援のために設立され、2011 年 3 月の東日本大震災と原発事故のため二本松市に避難・移転して事業を継続している NPO 法人コーヒータイムでは、職員と利用者の方々が数々の困難を乗り越えて笑顔を絶やさず活動していらっしゃることに深く感銘を受けました。

今回のイベントの実施にご協力、ご支援をいただいた JICA 二本松の洲崎所長はじめスタッフ、訓練生の皆さま、NPO 法人コーヒータイム橋本理事長はじめ職員・利用者の皆さまに心よりお礼申し上げます。

2017 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター  
センター長 浜野 隆



# 目次

はじめに

ページ

1. 活動の概要	1
(1) 活動目的	3
(2) 実施期間・場所	3
(3) 内容・プログラム	3
(4) スケジュール	4
(5) 参加者	5
2. 参加者報告書・活動記録	7
2-1. 参加者報告書	9
2-2. 活動記録	24
3. 資料	33



# 1. 活動の概要



## 1. 活動の概要

### (1) 活動の目的

国際協力ボランティアについて、独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松青年海外協力隊訓練所において、帰国隊員、訓練生等との交流を通じて、派遣先での業務等を具体的に理解すること。また、原発事故のため、浪江町から二本松に避難し活動をしている NPO 法人コーヒータイムを訪問し、障害者<sup>※注</sup>支援の実際と、原発事故による避難の影響について理解を深めること、同じ関心を持つ他大学の女子学生と意見交換を通じてネットワークを形成することを目的に実施した。（※注 本報告書では「障害者」に記述を統一する。）

### (2) 実施期間・場所

2017年2月16日（木）～17日（金）

福島県二本松市

独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松青年海外協力隊訓練所  
NPO 法人コーヒータイム

### (3) 内容・プログラム

選考試験に合格してアジア、アフリカ諸国に派遣予定の青年海外協力隊候補者が派遣前訓練中の独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松青年海外協力隊訓練所を訪問した。

1日目に、訓練所所長による JICA ボランティアの説明、訓練所職員、インドネシア、ガーナ、でのボランティア経験者のプレゼンテーションを受け、ディスカッションを行った。ボランティア経験者の方々とのディスカッションを通じて、青年海外協力隊の実際（派遣者のバックグラウンド、志望動機、職種、派遣中の業務・生活、途上国で学んだこと、帰国後の就職等）についての情報を得た。また、夕食後には派遣前訓練中の協力隊訓練生との意見交換・交流を行った。参加学生は、2日目の午前中に講義やディスカッションで得た発見や感想をグループでとりまとめお互いに発表した。

2日目には、精神障害者の自立に寄与することを目的として福島県浪江町で小規模作業所として平成18年に誕生し、現在は就労支援 B 型事業所<sup>※</sup>として作業・生活訓練を通して社会復帰・社会参加を促進する事業を行っている NPO 法人コーヒータイムを訪問した。NPO 法人コーヒータイムは、東日本大震災後の原子力発電所事故により浪江町全体が避難指示区域となったため、2011年10月二本松市に拠点を移して活動を継続している。橋本理事長から、団体の活動の概要、特に東日本大震災以降の活動の変遷や課題などについてお話を伺うとともに、利用者のみなさんの喫茶店での活動を見学した。

<sup>※</sup>障害者総合支援法（旧 障害者自立支援法）に基づく、障害者の地域における就労支援をすすめるための施設。通常の事業所に雇用されることが困難である、雇用契約に基づく就労

が困難である方に対して、就労の機会の提供及び生産活動の機会の提供、その他の就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の必要な支援を行う。

(出所：厚生労働省ホームページ)

[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaihashukushi/service/shurou.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaihashukushi/service/shurou.html) 2017/2/7 にアクセス)

#### (4) スケジュール

2/16	07:30	お茶の水女子大学 発 (バス)
	12:00	JICA 二本松青年海外協力隊訓練所 (以下 JICA 二本松訓練所) 着
	12:15	JICA 二本松訓練所広報展示室ブリーフィング
	12:30	昼食 (JICA 二本松訓練所食堂)
	13:30	JICA 二本松訓練所見学
	14:00	講座「JICA 事業/JICA ボランティア事業概要」 講師：洲崎毅浩所長、永井涼所員、湯澤千里所員
	14:40	JICA ボランティア経験者 (元青年海外協力隊員) による講座とディスカッション ・年野明美氏 (派遣国：インドネシア、職種：保健師) ・中山直樹氏 (派遣国：ガーナ、職種：青少年活動) ・永井涼氏 (訓練所職員)
	18:00	夕食交流会 (JICA 二本松訓練所食堂)
	19:10	派遣前の訓練生との意見交換会
23:00	消灯	
2/17	06:30	訓練体験参加「朝のつどい」
	07:10	朝食 (JICA 二本松訓練所食堂)
	08:00	片付け、荷物整理、居室退去、部屋チェック
	09:00	グループ・ミーティング、振り返りと学習成果発表
	10:05	JICA 二本松訓練所 発
	10:30	二本松市民交流センター 着 NPO 法人コーヒータイム 橋本由利子理事長講演 作業所・喫茶店の見学
	12:00	昼食 (二本松市民交流センター会議室)
	13:00	二本松市民交流センター 発
	16:40	お茶の水女子大学 着

(5) 参加者

お茶の水女子大学生	2人	(2人は体調不良のため急遽欠席)
奈良女子大学生	4人	
引率教員	2人	(原智佐特任准教授、青木健太特任講師)
合計	8人	(引率含む)

内訳

所属 学年	お茶の水女子大学				奈良女子大学		
	文	理	生	院	文	生活 環境	理
1	-	-	-	-	1	1	1
2	-	1	-	-	-	-	-
3	-	-	-	-	-	-	-
4	-	-	-	-	1	-	-
留学生		-	-	1(2)	-	-	-
小計		1	-	1(2)	2	1	1
合計	2(2)				4		

( )は体調不良のため急遽欠席

尚、一部プログラムは同時期の訓練所を訪問していた麗澤大学と合同で行われた。



## 2. 参加者報告書

- ・活動記録



## 2-1 参加者報告書

大山 理穂

奈良女子大学 文学部言語文化学科ドイツ言語文化学科 4年

### ・JICA 二本松での講座を通じて感じたこと・印象に残ったこと

JICA の講義や訓練生の皆さんと話して一番印象深かったことが 2 つある。1 つは、キャリアの積み上げ方が（当たり前だが）人それぞれでバリエーションがあったこと、もう 1 つは異文化とのかかわり方である。

初めから国際協力隊員になりたいと思ってキャリア設計をしていた人もいれば、今まで国際協力を考えたことはなかったが自分の経歴を国際協力に役立たせようと思って隊員を志望した人などがあり、自分のこれから進む道に少し自信が持てた。隊員それぞれのキャリアの歩みがあり実際に聞いて良かった。特に、私と同じようなキャリアを持つ隊員の話（女子大出身。3 年ほど IT ベンチャーで働き、コミュニティ開発部門で女性支援をする予定）が聞いて、私の将来の道が少し広がった。コミュニティ開発の分野に女性支援の部門があることを今回の研修で初めて知ったので将来応募してもいいと思えた。

2 つ目の異文化とのかかわり方だが、このテーマについてはボランティア経験者の年野さん、中山さん両者のプレゼンで紹介されていたものが印象的だった。お二方は任期中、それぞれ違う文化圏だからこそ生まれる問題（年野さんなら衛生面の不徹底さ、中山さんなら学校での体罰）に対し比較的寛容に務めているように感じた。外国で日本の常識は通じないし、たとえ自分の意見が客観性を帯びていて正しそうだとしても意見を押しつけない、そのような二人の対応は誰でもが出来ることではない。年野さんは自分が手本になるのではなく、現地の人で手本になりそうな人を見つけ周りの人に少しずつ習慣を広めていく、中山さんは現地の教育系のグループと接点を持ち彼らの啓蒙活動の支援をした。二人のアプローチはどちらも意見の押し付けではなく、現地の価値観をあくまでも尊重している。「自分はスキルを持っているかもしれないが、外国人でありよそ者である」という立場をうまく利用し、外国人である自分にしかできない事を実践されていた点が素晴らしかった。

### ・NPO 法人コーヒータイム訪問を通じて感じたこと・考えたこと

私の今回の研修の一番の目的であったが、事前の質問にも全て回答いただき、直接質問をしたときも快く答えていただけて大満足だった。

コーヒータイム訪問前は「作業所」に対して煮え切らない思いを抱いていた。コーヒータイムのようにカフェを運営したりお菓子を作ったりする作業所や障害者支援施設は多く、特に地方では彼らの労働で得られる収益が少ない。そのため多くの障害者が国の定める最低賃金以下の工賃を受け取り、親元を離れ真に自立することは難しい。実際、この NPO 法人も、利用者が年金を受け取っていること、この作業場は今後、利用者が別の施設で働くときの練習場の役割を担っているということを理由に、彼らに自立できるだけの工賃を渡せ

ていないようだった。養豚場と組んでブランド肉を使ったレストランを運営している作業所もあるが、もう少し収益面を考えないのかと質問したところ、もしお客さんがたくさん来てしまうと、それに合わせて利用者に無理なノルマなどを課しかねないとして、今のところは検討していないようだった。

利用者の収入と作業負担のバランスは思った以上に大切であることには深く共感した。しかし、商品単価が低すぎる問題や雇用問題（次の就職先を見つけた人が10年で3人）など課題は山積みのものである。この作業所だけでなく、多くの作業所・支援施設が同じような悩みを抱えている。こういう所にこそ、利用者が大事な作業に集中できるようにAIや作業の自動・効率化が導入されるべきであるし、ビジネスモデルも見直されるべきである。例えば、客一人当たりの単価が上がるように商品を変更することや、芸術など障害者である彼らしかできない分野で事業を積極的に行うことなどが挙げられる。また一般企業には2.0%の障害者雇用率が義務付けられているが、達成している企業は48.8%<sup>(注)</sup>（平成28年）であるし、非正規雇用やパート・アルバイトとして雇っても数値に換算されてしまうため、本当に障害者雇用を積極的な企業は少ない。ツアー参加者の張さんは、中国には障害者を雇っている企業に適應される減税政策があると話していた。日本の行政も見習うべきだと感じた。

#### ・今後の学習や研究に向けた抱負

私は今後ジェンダーの分野で若者への啓蒙活動をしたいと考えているが、国際協力の分野ではないが、異文化理解の理論をもう少し学んでみたいと思えた。私のやりたい啓蒙活動は、全くその分野の知識の無い人との付き合いやその人たちに考えを受け入れてもらう過程を必要とし、これはまさに異文化に寛容でいることと同じである。自分に欠けていた視点を再認識するいい機会だった。

また、別のワークショップに参加していた麗澤大学の学生達は隊員たちが受ける外国語の授業や野外訓練を受けていて、話を聞かせてもらった際に大いに興味がわいた。せっかく福島県に来たのもう少し長期滞在して現地に住んでいる人との交流や自由時間があればより良かった。



(写真) 朝会で練習した空手の型

(注) <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000145259.html>

楠原 佳奈

奈良女子大学 文学部 1年

### ・JICA 二本松の講座を通じて感じたこと・印象に残ったこと

「国際協力に、評論家はいない。」JICA 二本松所長のこの言葉が、とても印象に残っている。意見や文句を言うだけでは一向に現地の問題は解決されない。実際に行動して見せて、初めて伝わるといふ国際協力の在り方について学んだ。発展途上国で2年もの間一人でボランティア活動をするとなれば、派遣先の治安の悪さや感染症のリスクなど、不安を挙げればきりが無いが、それ以上に、好奇心や想像力、挑戦したいという熱意が、多くの人々の夢を実行に移してきた。「他者に喜ばれているという実感」から、「感謝する日々」が送れるという素敵なサイクルが国際協力ボランティアにはあるということがわかり、国際協力やボランティアそのものにより興味が沸いた。実際に派遣された年野さんや中山さんの講義では、楽しいことだけでなく、伝わらない・予定通り進まない・そもそも設備がない等といった現地でのシビアな問題も含めて、葛藤した日々とそれらを乗り越えるためにした努力についても話していただき、国際協力の大変さとやりがいを同時に知ることができたように思う。現地で活動していくには言語の壁だけでなく、異文化理解の問題や衛生の問題、治安の問題もある。大事なことは現状を正確に分析し、解決策を探り、出来ることからやっていく姿勢であり、このように自主的・自発的な行動力が試されるというのは、国際協力ボランティアだけに限らず、生きていく上でも大事な姿勢のように思った。派遣前の訓練生のみなさんはとても気さくで話しやすく、交流会では楽しく有意義な時間を過ごさせていただいた。話せば話すほど魅力が溢れる人ばかりだった。異なるバックグラウンドを持ち、国際協力に興味があって、自分のやりたいビジョンをしっかりと持っている皆さんが集まっているから



(写真1) 6:30からの「朝の集い」に訓練生にまざって参加



(写真2) 東日本大震災で被災した福島へ各国から贈られた、エールのこもった品々

こそ、そんなみなさんと共同生活する訓練自体にも、とても魅力を感じられた一日であった。訓練生の皆さんと話す中で、「アウトプット(仕事)」に追われる毎日から解放され、70日間「インプット」ができることの喜びを知っているからこそ、70日間のトレーニングも楽しんで臨んでいるのだろうなと思った。訓練生の方が、派遣される直前の気持ちとして、「自分の力を試したい」「今の自分を変えたい」といった想いと共に、「実はとても怖い」といった不安も率直に話してくれたおかげで、親近感が湧いたのも、印象的な出来事であった。飾らず、ありのまま話してくれるところも訓練生の方々の大きな魅力の一つである。また、意外にも退職してJICAにチャレンジしている方がとても多く、自分の中の、キャリアのイメージが大きく変わった。訓練生との交流を通して、もちろん一つの仕事を長年続けることは重要だが、今しか出来ないことやどうしても

やりたいことを、将来の不安のために諦めてしまうのはもったいないように思えた。退職してこれから赴任される皆さんの後悔のない前向きな姿や、赴任された方々の価値観の変化についてのお話から学んだのである。今回の交流や講義や体験入所を通して、国際協力やボランティアに興味をさらに沸いたので、これからは機会を待つだけでなく積極的に機会を探してできることをやっていきたいと思う。

#### **・NPO 法人コーヒータイム訪問を通じて**

私は今回、震災以来、初めて福島を訪れた。被災された方の声を直接伺うことができたのも初めてだったのだが、震災から 5 年たった今も浪江町には戻れず、それでも生きていくために故郷から離れた土地で住むことを求められ、結果多くの家族がバラバラになってしまっているという現状を聞いてとても悲しい気持ちになった。それでも、「いつまで避難民なのか？」という葛藤を持ちながら二本松市で「コーヒータイム」を続けていらっしゃる姿勢に、胸が熱くなった。ボランティアのうちの一人から、現在は所長さんになられ、多くの人を支援されているという橋本さんのお話を伺って、ボランティアの可能性の大きさを感ずることができた。

また、精神疾患という病や作業所についても学ぶことができ、特別な資格がなくても、病への理解促進や日常生活（例えば公共交通機関）で彼らが過ごしやすい場所づくり等には貢献できることはまだまだあるように思ったので、少しずつ貢献できればいいなと思う。作業所のアットホームな雰囲気に私の心も癒していただいた。今回は滞在時間もあまり長くは取れず、利用者さんのみなさんやほかの職員のみなさんとはあまりお話できなかったのも、また福島に来てコーヒータイムを訪れた際にゆっくりお話しできればと思う。

#### **・国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと**

JICA のメンバーとして任国で国際協力ボランティアをされる方も、コーヒータイムで職員として働かれている方も、とても楽しそうで、生き生きされていたのが印象的だった。人を支援するという行為は、決して相手にただ「与える」だけでなく、相手方から「与えられる・学ばせてもらう」ことが大いにある。それは、喜んでもらえる気持ちであったり、交流することで知られる新たな価値観であったり、人によって感じる場所はそれぞれだと思うが、このことを常に意識して人と向き合っていくことは、相手と良い関係を築いていくのにとても重要なことだと改めて思った。

また、「行動力」と「熱意」を大事にボランティアや支援を行えば必ず道は開けてくることも学ばせていただいた。様々な理由をつけてなかなかボランティアに踏み出せないでいたが、まず、一步踏み出してみる重要性を知られたことは、これからの私の人生においてもきっと役に立つと思う。そして、ボランティアが人と人との間をつなぐものである以上、支援したいという気持ちは重要であるが、相手方を尊重することもまた、とても重要であるということも学んだ。異なる文化や価値観を理解しようとする配慮やリスペクトの気持ちを、まず態度に示すことが信頼関係を築くことにつながり、国際協力や支援には遠回りに見えるが実は、何よりの近道なのである。

### ・今後の学習や研究に向けた抱負

まず、周りへの感謝の気持ちを忘れずこれからの大学生活や人生を過ごしたいと思う。そして、すべての始まりである現状を冷静に分析する力をつけていきたいと思う。そのために、日ごろから多角的なものの考え方を意識し、異文化に積極的に触れあい、分析する視点を増やす努力を精一杯したい。その中で、忘れがちな根本的な疑問こそ大事にて問題に向き合う姿勢も大事にしようと思う。とくに私は将来教育に携わる仕事がしたいと思っているので、この姿勢は必ず後で生きてくると確信している。

また、先のリスクを考えて一步踏み出せないでいた自分の姿勢を改め、素直にやりたいことに自発的にどんどん挑戦し、行動していきたい。学習や研究は1人ではできないことも多いし、ディスカッションして新たな見地にたどり着くことも大いにあるだろう。一緒に研究する仲間との人間関係をより良いものにしていくためにも、自分の考えを一方向的に押し付けるのではなく、まず相手の考えを尊重し受け止めてから、妥協点を見出すことを胸に刻んでおきたい。

JICAのみなさん、コーヒータイムのみなさん、そして、今回一緒に様々な経験をしたお茶の水女子大学のみなさんや奈良女子大学のみなさんとの交流をこれからも大事にさせて頂き、自分の頑張るモチベーションにしたいと思う。



(写真3) 杉乃家さんの中に飾ってあった横断幕  
「がんばろう! 浪江 ありがとう二本松」



(写真4) 極太麺の浪江焼きそば@杉乃家

張 輝

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科研究生

### ・JICA 二本松での講座を通じて感じたこと、印象に残ったこと

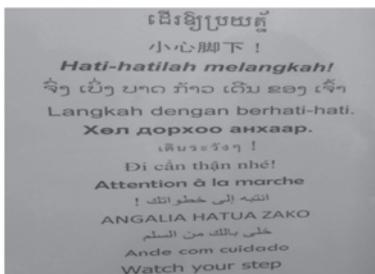
JICA 二本松に行く前、青年海外協力隊員は必ず一定の専門的な技能を身に付けていると思った。しかし、JICA 二本松で洲崎所長の講演を通じて、国際協力には様々な形があり、最も大切なのは好奇心と想像力（シミュレーション）であって、必ずしも専門性のある技能と資格を持っているとも言えないと分かってきた。そして、青年海外協力隊経験者の経験談によると、隊員は日本国内にいる時、十分に任地の状況を把握できないため、実際に任地に行ってから、自主的・自発的に現地の状況を分析し、確実に実行し得る協力の計画を立て、それを実行する能力も非常に大切だと認識されている。

青年海外協力隊員に対して、任地の言語を身に付けることも非常に大切である。それに応じて、JICA 二本松の 2 階では語学の授業も行われている。スタッフルームや壁などのところに、多国の言葉で書いた標語も張ってある。これから外国語の溢れている任地へ行く隊員にとって、これらの標語で非常に良い言語環境ができたと思う。

食堂では、残ったおかずを他人にあげ、みんなの協力でできる限り浪費しないように努力をした。JICA 二本松の 1 階では、マッサージチェアが 1 台置いてあり、これはある人が原発事件で一時避難地となった JICA 二本松で避難していたお年寄りのために自ら JICA 二本松に寄贈したものである。そして、廊下には初対面の人であっても、お互いに笑顔で挨拶をし、JICA 二本松には暖かく、協力し合う雰囲気が溢れていると感じた。



(写真1)「頑張って、福島！」福島原発事故が起こった後、世界からの応援の声である。



(写真2) 壁に貼ってある 14 カ国の言葉で書いた「足元にご注意ください」



(写真3) 原発事故で一時避難所となった JICA 二本松で避難しているお年寄りのために寄贈された「愛のマッサージチェア」

### ・NPO 法人コーヒータイトム訪問を通じて感じたこと・考えたこと

福島県では、震災後に抱えた課題を解決する為に、広報や宣伝・デザイン協力を行う NPO、技術指導・機材提供を行う企業及びボランティア活動をする地域住民がつながり、福島発障害者協働プロジェクトができた。このプロジェクトは「魔法のおかし・ぼるぼろん」と「ミシンの学校」を作り上げた。おかしを作る作業を通じて障害者は仕事の機会を得、自分自身の生きがいを見つけるようになった。「ミシンの学校」では、それぞれに得意な仕事を受け持ちながら、様々な布製品を作り上げていく。

福島の障害者協働プロジェクトは私に中国の障害者を思い出させた。2016 年、中国の障害者総数はおよそ 8500 万人に達した。障害者就職問題は既に中国の社会問題の一つになっている。中国では、障害者が作った事業に税金の減免や無利子貸付などの政策は実施されているが、障害者の事業が技術や宣伝力が薄弱であるため、事業を展開するのはかなり困難である。福島発障害者協働プロジェクトは企業、NPO 及び地域住民の連携で技術や宣伝力の不足の問題を解決でき、これからの中国の障害者の協力事業に優れた手本になったと思う。東日本大震災後、被災地域の避難解除がされれば、町に戻ることはできる。しかし、放射線への不安や避難指示が解除されると住めなくなった家にも税金がかかるようになるため、家に帰りたいけれども帰らない、貴重な思い出が残されている家屋を取り壊す住民の数も少なくないそうだ。環境省によると、2017 年 2 月 10 日現在で、浪江町の家屋の解体申請

数は約 2000 件にのぼる。解体作業は無料だが、被災者は簡単に解体を決められるわけではない。津波で家を失った被災者と同じように、家がなくなる痛みを感じる人も大勢いる。

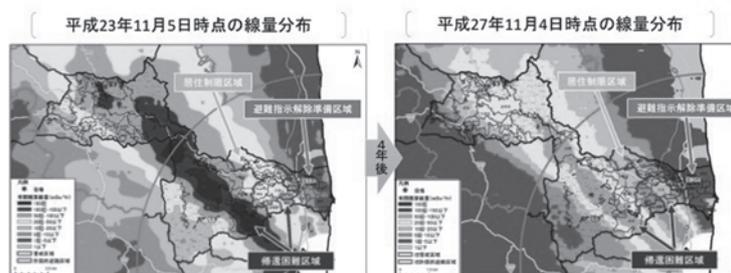
これから、被災地域の復興に向けて、数多くの課題が残されていると思う。学生である私たちは今回の 2 日間のイベントで自分が把握している福島被災地域の状況を周りの人に伝え、みんなのチカラで、福島発障害者が丁寧に作った商品をウェブサイト (<http://fkp13.jp/>) で注文することなどの行動を通じて、福島被災地域の復興事業に応援できると思う。



(写真4) NPO法人コーヒータイム及び福島発障害者協働プロジェクトのパンフレットと障害者たちが丁寧に作った美味しいお菓子。丸くて小さいお菓子は「ぼるぼろん」である。



(写真5) 「小箱ショップ」では浪江町の皆様の手づくりの製品を多数販売していて、市民の憩いの場として親しまれている。



※第4次航空機モニタリング(平成23年12月16日公表)及び第10次航空機モニタリング(平成28年2月2日公表)の結果を基に内閣府原子力被災者生活支援チームが作成。

(図1) 「浪江町における放射線量の推移」今回訪問した浪江町が四年間経って、帰還困難区域の面積はかなり縮小した。しかし、帰還困難区域や居住制限区域はまだ存在している。

#### 【参考資料】

①浪江町ホームページ「浪江町の復興・再生に向けた取り組みについて」(平成29年1月～2月の住民懇談会配布資料)

<http://www.town.namie.fukushima.jp/uploaded/attachment/6589.pdf>

②【2月17日付ハフィントン・ポスト紙】「震災から6年近くたった今、家が次々と壊される浪江町 福島の空にドローンを飛ばす理由とは」

[http://www.huffingtonpost.jp/2017/02/14/fukushima-drone-matsumoto\\_n\\_14743212.html](http://www.huffingtonpost.jp/2017/02/14/fukushima-drone-matsumoto_n_14743212.html)

西村 優花

奈良女子大学 理学部化学生命環境学科 1年

・JICA 二本松での講座を通じて感じたこと・印象に残ったこと

実際に派遣され、隊員としての仕事を終えられた2人の方からお話を伺い、率直に感じたのは言い渡された業務をこなしに行ったのではない、ということであった。大まかな mission を事前に言い渡されている状態で派遣されていることが説明にあったが、それを達成するための現状分析、計画、実行手段を自分で考えなければならない。そして、必ずしも現地の人を受け入れてくれるわけではないため、自分の力で信頼関係を築き、自分の仕事を理解してもらわなければならない。私が想像していた以上に大掛かりであった。しかし、その分自分のやりたいことや、必要だと感じることができる自由度の高い環境があるということを知ることができた。そんな環境での2人の元隊員の行動力とその仕事内容に私は心を大きく動かされた。

2人の隊員が共通して私たちに向けて伝えたのは現地の文化を尊重したということであった。私は異国の文化を尊重するということを学んだことがあったが、元隊員の経験からこれを教わることで、新たに学んだ感覚がして、自分は異国の文化を尊重するということがどういうことなのか分かっていなかったのだと後から自分を振り返った。例えば、ガーナでは勤務時間が曖昧な教員が多いそうだ。仕事に重点を置く日本人の私はそのことに関して良くないという印象を抱く。しかし、ガーナでは日本ほど仕事に重点おいていないことや宗教と生活の結びつきが強いという文化的背景があるため、結果として生み出される状況なのである。単に時間感覚が違うと思っていたが、こういった文化的背景があることに気が付かなかった。相手を知り、適応するべきことがたくさんあると気づくことができた。

そこで、疑問が一つ頭の中によぎった。良くないと思ったことでも彼らのスタイルとして尊重すべきことと改善を求めべきことはどう区別していけばいいのだろうか、ということである。保健師として派遣された隊員さんは保健師として現地の生活から改善すべき点は多く見出したがすべてを改善したのではなく、彼らの考えも尊重した上で改善を言及したため、変えなかった点もある。しかし、現地の人の中には衛生管理のしっかりとしている家庭もあることを周りの家庭に伝えることで衛生管理の大切さを説くことでできる限り改善を求めた。この方法を聴いて、様々な人に目を向けて考えていくことで判断していけばいいことを学び、疑問が解消した。また、自分よりも現地の人の方が影響を与えやすい存在であるということは私にとって新たな発見であった。

青少年活動の隊員さんも現地の人の方が周りの人に影響を与えやすいことを活動の中で効果的に取り入れていた。それは、ガーナの子どもたちに対してである。ガーナの子どもたちの夢は壮大であるが、貧しさゆえに叶えようとしない。そこで、ガーナ人で立派に夢をかなえた人を紹介することで夢をかなえるための努力をするように働きかけた。この方

法が人間育成にも効果的であることに驚いた。また、隊員がこういった人間育成に力を注いでいることも非常に印象的であった。

#### **・NPO 法人コーヒータイト訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと**

コーヒータイトのカフェは中に入った瞬間からその空間だけ時間がゆっくりと進んでいるような落ち着きのある雰囲気であった。震災前の浪江町でどんな活動をしていたのかということから現在の二本松に拠点を移す次第に至るまでを事細かく教えていただく中で、自分の知っていることが何一つない世界であったため、私にとって全てが新たな収穫であった。例えば、浪江に拠点があった時に年配の方と利用者さんとの相性がとても良かったというお話はとても勉強になった。

また、様々なことを教わる中で、コーヒータイトの商品を買うことが利用者さんの利益や社会復帰につながると知り、もっとインターネットで広めてはどうだろうかという提案があがった。しかし、そうなるとう仕事量が増え、利用者さんの仕事のペースが乱れてしまう問題が新たに発生すると教わった。特に接客の仕事はとても大変と聴いていたので、客数に関しても多いことが良いのではないという自分にとって新たな考えをすることができた。そこで私は、この事業には仕事が栄えることが大切なのではなく、仕事と人のバランスが重要なカギとなっていると感じた。

さらに、この活動において長期にわたる継続性についても考えせられた。精神疾患を抱えていると調子のいい時と悪い時がある。調子の良い状態が続くと問題ないと考えられるが、調子が悪くなる可能性があるため、長期的に利用者さんと関わっていく必要がある。

コーヒータイトは10年程続けているようで、最初から今も続けている利用者さんもおられるので、そう考えると10年も見守り続けているということである。震災があっても今も続けて手厚いサポートをしていることにこの団体の強さを感じた。

コーヒータイトのような環境が求めていることはこの活動を大きくしていくことではなく、この活動を長く続けていくことなのだとは私は理解した。だからこそ、震災や原発という大きな壁を乗り越え、二本松で活動を復活された。並大抵ではない継続性があるという印象を受けた。

#### **・国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと**

国際協力と被災地支援ボランティアのどちらにも通じることは活動をしている人が主役ではないということである。青年海外協力隊の報告動画では隊員が活動をしている時に限った支援ではなく、将来を見越した支援をしなければならないということがわかる内容であった。導くことが本筋で、実際に環境を変えていくのは現地の人自身であるということを実感させられた。これは国際協力だけでなく、コーヒータイトさんでも考えられたことである。利用者さんが主体であり、周りの人がそれを先導していく形がみてわかるスタイルであった。つまり、この2つのボランティアは働きかける相手の伴走者にならなくてはいけない。私自身がボランティアを今後やる時にはそのことを心に留めておきたい。

#### **・今後の学習や研究に向けた抱負**

訓練生と交流することでボランティアの形は様々であることを知った。支援したい心があれば専門知識がなくてもボランティアはできるということを訓練生の方々から学ばせてもらった。所長の話ではボランティアに評論家はいない、行動家が必要とされているのだと教わった。私は高校生の時から大学生になったら何かボランティアがやりたいと考えていた。しかし、支援したい心があっても自分に何ができるのかを考えたり、ボランティアができる団体を探したり、現状を知ろうとするだけで何も支援をすることができていなかった。今回の経験で私はボランティア団体に所属していなくても、内容が地味でも、微力でも行動することこそが自分のやらなくてはいけないことなのだと考えた。実際にボランティアとして行動を起こしている方たちと意見交換をする中で、自分は何もできていないその無力さが非常にもどかしかった。私が今後やりたいのは教育支援である。中高時代に私がボランティアをやりたいと考えるきっかけになった絵本と図書館の支援事業に関わりたくてこのイベントを終えてから思うようになった。また、私のように支援したい心はあっても行動に起こせなくてもどかしい思いをしている友人が周りにはいるので、今回学んだことを伝えていきたい。

馬淵 友理

奈良女子大学 生活環境学部心身健康学科 1年

#### ・JICA 二本松での講座を通じて感じたこと・印象に残ったこと

JICA 二本松青年海外協力隊訓練所では、所長をはじめ、多くの JICA ボランティア経験者のお話を伺うことができた。中でも、洲崎所長の話は心に残るものがあった。国際協力とは特定の能力を持った人にしかできないものではなく、どんな人にもできる国際協力の形はあるのだということ。そして、与えられた環境を最大限に活用する積極性や自発性をもった「行動者」が、世界には必要とされているというこ



(写真1) 洲崎所長のお話

と。何事も熱意をもって行うことが、人生を全うするのに大切だということだ。たった 30 分のお話の中で、国際協力に限らず、これからの生き方において学ぶべき点が多くあった。ほかの誰よりも自分が「熱くなれるもの」を見つけ、それを実行していくことで他者を喜ばせる。その「他者に喜ばれている」と実感できる暮らしこそが、生きがいのある幸せな人生であり、それを実行できるものが「行動者」である。自分もそのような「行動者」でありたいと強く思った。この大学間連携イベントに積極的に参加したように、今後も、自分に与えられた環境や機会を最大限に活用して、自分が熱意をもって行えるものを探していきたい。そして、その先に他者を喜ばせられる未来を創っていきたくと思う。

また、JICA ボランティア経験者の中山さんのお話も興味深かった。中山さんは国際ボランティアに興味があったわけではなく、仕事を変えたくて JICA ボランティアの訓練生になった。きっかけは、自分の仕事を変えたいという思いからであったが、実際に JICA で国際協力に携わることで、仕事だけでなく自分の考え方も変えることができたという。発展途上国のガーナに行ったことで、お金の重みが分かり、お金と幸せが必ずしもイコール関係にならないことを学んだそうだ。さらに、メディアを見ているだけでは分からない、現地の状況を自分の目で見ることができ、世の中を見る目が変わったという。また、ガーナの子どもたちは一人一人が大きな夢を持っているのにもかかわらず、何もかもが行き届かない環境を理由に行動を起こそうとしなかったそうだ。そうした子どもの姿を見て、ガーナで貧しいながらも大学教員になった人と、子どもたちとをインターネット上で討論させる機会を設けたそうだ。すると子どもたちの夢に対する姿勢が変わり、努力をするようになったようだ。

さらに、同じく JICA ボランティア経験者の年野朋美さんは、「勤めていた会社で得た知識を経験に変えたい」と、勤務していた会社を退職し、保健師としてインドネシアに向かったそうだ。また、日本で起こった数々の大震災の際に支援してくれた世界の国へ、恩返しをしたいという思いもあったそうだ。年野さんは、現地に行ってみて問題点を見つけるところ



(写真2) 年野朋美さんのお話

からスタートしたという。「薬を患者さんに届けるだけでは、病気の発症原因を突き止めることができない」と訪問看護支援に力を入れた。さらに、年野さんはインドネシアの家庭にホームステイをすることで、現地の衛生管理の問題点を実際に目にすることができたという。そこでは、川で排泄排便を済ませたり、その川の水で体を洗ったり、家のキッチンのシンクに赤ん坊が排便するなどの現状が繰り返られていた。このままでは一向に衛生状況が改善しないと考えた年野さんは、手本になる人を探して、その人の習慣をまねしてもらおうことで、少しでも家庭内の衛生状況を改善してもらおうとした。

以上の2名の JICA ボランティア経験者のお話で学んだことは、「国際協力において大切な力は、現地に行ってみて自分で答えを出す力である」ということである。どんなに事前に調査をしても、実際に自分の目で見てみないとわからないことも多いと経験者は語る。自分で現状を把握し、問題点を見つける。それから解決策を考え、実践する。こうして自分で答えを導き出すのである。そして、国際協力の難しい点は、コミュニケーションを上手にとることであるようだ。現地の人に伝えたいことがあるときは、自分が相手にどうしてほしいのか、どうしてそうしてほしいのかを理解してもらえようように会話を何度も重ねることが必要だったという。人間性で努力して、コミュニケーションをとるようにしていたという。日本と外国とでは、言語も違えば文化も違う。そうした様々な違いを互いに理解し合い、それぞれの良いところを素直に取り入れ合うことが国際協力には必要であると痛感した。

訓練生交流会や、派遣前の訓練生とのディスカッションでは、たくさんの JICA ボランティア訓練生のお話を伺うことができた。保健師として現地の健康水準の向上を目指しに行

く方、JICA に来る前に勤務していた会社で学んだマーケティングを現地へ実践しに行く方、現在勤務している会社で選抜されて、1年間 JICA の訓練生として派遣される方、結婚をして早々に海外にコミュニティ開発をしに行く方、これまでの経験を生かして現地の障害者のサポートや、青少年の社会更生をしに行かれる方、手工芸を教えることで現地の方が自分でお金を稼げるようにしたいと考えている方など、様々な背景と目標をもった方のお話を伺うことができた。

話を伺っていると、JICA の訓練生になるために勤務していた会社を退社したという方が多かったため、その際に大きな不安や覚悟はなかったかどうかを伺ってみた。すると、案外潔く会社を辞めている人が多かった。例えば保健師としてアフリカに行かれる方は、「保健師の仕事をしていて、日本はもう健康を保つための基盤ができているから、今の自分の仕事は日本には必要ないのではないかと思った。日本ではなくて、健康を保つ生活基盤が成り立っていない発展途上国に自分に行くべきだと思い、会社を辞めて JICA の訓練生になろうと決めた」とおっしゃっていた。この話を聞いて、彼女の思いに感心しながらも、決断力の強さに驚いた。

彼女のほかにも、「自分はきっとほかの場所で必要とされているはずだ」と判断して、JICA の訓練生になったという人がたくさんいた。自分の力を発揮すべき場所を考え、現地に出向いてそれを実行しようと試みる熱意に、強く胸を打たれた。きっと、こういう人たちの力が、国境を越えて世界の希望につながるのであろうと思った。

#### **・NPO 法人コーヒータイト訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと**

NPO 法人コーヒータイト訪問では、理事長の橋本由利子さんから、コーヒータイトの活動内容や震災の影響についてのお話を伺った。ここでは、主に精神に障害があつてずっと家で過ごしていた方や、病院を退院してすぐの方に、社会復帰の一段階として働く場を提供するというボランティアを行っている。コーヒータイトは元々福島県浪江町にあったが、東日本大震災の影響で二本松市に移転した。浪江町は今年の 3 月末に、避難指示が解除される予定であるが、避難指示が解除されると、住めなくなった家にも税金がかかるようになるため家屋を解体する人が続出している。そういった事情もあり、避難指示が解除されても浪江町に戻ろうとする人は少ない。橋本さんも、ほとんどの従業員が浪江町に戻りたくても戻れない状況であるため、コーヒータイトの拠点を浪江町に戻す予定はないという。

こうした被災地の現実を知ることができたことが、ここでの収穫の一つであった。実際に障害者の方が働いている様子を見に行くことができ、具体的にどのように活動しているのかを見ることができたことも貴重な経験になった。最後に従業員の方々の手作りの商品も見せていただいたが、品質の高い商品が多く、見た目もかわいらしいものが多かったため、私も何点か買わせていただいた。こうして障害者の方にもできることから社会に貢献してもらおうというボランティアは、とても価値があり、需要のあるものだと感じた。

コーヒータイトの問題点としては、商品を作ってもなかなか売れないこと、商品のグレードをアップしていかないとほかの会社の商品とは対等に戦えないこと、売れたからといっ

て販売数を増やすと従業員の作業が手に負えなくなることが挙げられる。これらの問題に対して橋本さん達は、消耗品を売ることによって売り上げの向上を狙ったり、添加物を少なくして他社と差をつけたり、販売数に制限を設けて調整したりしている。

こうしてみていくと、国際協力にも国内のボランティアにも、問題を見つけて自分で答えを探していく作業が重要であることが分かる。今回の大学間連携イベントで学んだ知識や考え方を、他者のために行動するとき積極的に取り入れていきたいと思う。

森島 佑美

お茶の水女子大学 理学部数学科 2年

### ・JICA 二本松での講座を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回一番感じたのは、「実際に現地に出向かないと分からないことも多い」ということである。私自身、参加前にも JICA に勤務経験のある（あった）方々と何度か話す機会があった。しかしこの 2 日間という短いイベントに参加し、実際に訓練生や経験者のお話を聞き、交流をしていく中で多くの気づきの点があり、今まで当たり前だと思っていたことが覆されるようなこともあった。派遣前の訓練生や経験者の方々からも、同じような言葉を何度か聞いた。現地からボランティアの要請が具体的でない場合が多いため、訓練生は現地での状況を十分に知らない中で自分の取り組みたい支援について計画を立てているようだった。また実際に現地派遣されてみると、支援を進めるために働く環境が整っていないことがあるそうだ。講義をしていただいた年野さんは、前任者の評判などからカウンターパートとの関係性が最初うまく作れなかったり、ホームステイして現地の衛生面で気づいたことがあったり苦労も多かったと語っていた。支援の方法はこうしなければならないと決まっているわけではないので、実際に現地に行ってから、自分のやりたい支援と求められている支援の丁度良いところを探していくしかないのだと思った。

その中で、現地の方々にプラスとなるような支援を行うために、協力隊の方々は特に 2 つのことを大切にしていた。1 つ目は「相手の文化に敬意を払うこと」である。日本と異なる文化の下で日本人の常識や文化を押し付けても現地の方々は意見を聞き入れてはくれないし、普及しない。派遣期間が終わっても現地で継続できるような支援成果を残すためには、相手にわかりやすいように意見を伝えつつ、相手の考えをしっかりと聞き出して現地の潜在的な力を引き出せるよう働きかけるべきなのだと感じた。2 つ目は「自発的かつ柔軟に問題解決策を考えていくこと」である。ボランティアの具体的内容は前任者がいる場合でも与えられているわけではない。そのため、自分が 2 年間の派遣の中で行いたい支援というものを明確にしておく必要がある。一方で現地の状況を自己分析して、自分の考えていた方法を適宜変更してより現地にあった改善策を見つけていくことが重要なのだと思う。今回のイベントで話した方々は皆話を熱心に聞いていただいたり、私に興味を持って色々質問してい

ただいたり、意見を尊重していただいたり自分という存在を尊重してくれる印象を持ちとても嬉しかった。このような姿勢は協力隊として派遣される際にも非常に大切なことなのかなと感じた。

### **・NPO 法人コーヒータイト訪問を通じて感じたこと・印象に残ったこと**

コーヒータイトでは、理事長の橋本さんに「心に障害を持った方の就労支援」と「被災地福島」について興味深いお話を聞かせていただいた。

日本では障害者の雇用が増加傾向にあるものの、精神障害者は身体障害者や知的障害者に比べ就労支援が進んでいないということは聞いたことがあった。心に障害のある方は精神や健康の状態に波があり、毎日働くことは大変であるようだ。コーヒータイトでも、精神障害者に特化したボランティア講座を開くなどの取り組みも行っているそうだが、メンバーが一般企業に就職しかつ長期間継続して勤務できるケースは少ないという。橋本さんは、この法人を様々な人に知ってもらいたい気持ちもあるが、あくまで当事者のペースで行う必要があることが難しいと語っていた。消費して何回でも買ってもらえる商品を作ることによって利益を継続的に得ることはできるが、仮に商品の人気が出た場合も精神的に負担になってしまうために生産量を増やすことはできない。また逆に利益が少ないのも問題になるため、丁度いいところの需要と供給の関係性がなかなか大変だと思った。

当事者の就労支援にはまだ課題が多く、私自身この問題についてまだ理解の足りない部分がある。事務所では橋本さん含め当事者をサポートする立場の方が、障害のある方のペースに合わせて温かく見守っている様子がとても印象的だった。また、コーヒータイトで作られたボールペンやコースターなども手にとってみると非常に心温まるもので、幸せな気持ちになった。私がこういった障害のある方の支援施設が多くあることを心に留め、商品を買うことが少しでも支援になればとても嬉しいと感じた。

### **・国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと**

これまでボランティアはあくまで支援を受ける人が主体になる必要があるため、支援する側は「自分を変えたいから」など自分への見返りを求めることはあってはならないのだと考えていた。しかし、訓練生や経験者の方に応募した理由を聞いてみると、「自分の置かれている環境を変えたいから」「日本とは違う世界を見てみたいから」「職業の経験を積みたいから」などという意見が思ったよりも多く驚いた。確かに、2年間異国の地でボランティアを行うにあたって人のことばかりを考えるのではなく、自分の成長や現地での生活、人々との交流を最大限楽しむことがモチベーションにも繋がるのではないかと思った。これは国内の被災地支援についても同様のことが言えるはずだ。

また、協力隊については要請の種類が非常に豊富であることが知れたのも収穫であった。私は国際協力につながるような資格を取っていないため、協力隊というのとはどこか遠い存在のように感じていた。しかし今回専門知識や資格を有していなくても協力隊になれる方も多いと知り、もしかしたら自分でも挑戦する事が出来るかもしれないとも思った。将来そのようなボランティアに挑戦するかは分からないが、自分の将来の選択の幅が広がった。

### ・今後の学習や研究に向けた抱負

今後はこれまで以上に、自分の専門分野（数学）についての学習を大切にしていきたい。日頃から数学科所属というのに驚かれる機会が多いが、そのことを長所として生かすためには十分に専門知識・技術を身につけなくてはならないと感じたからだ。

それと同時に、私が興味のある「国際協力」という分野についても引き続き理解を深めていきたいと感じた。これまでも自立支援プロジェクトを行う海外の村を視察するスタディーツアー、国際協力や JICA に関する授業・イベントなどに参加してきたが、今後は本や授業などで国際協力についての知識を得つつまた色々なイベントに参加しようと思う。その際には「実際に現地に出向かないとわからないこともある」ということも頭に入れておきたい。

数学も国際協力も自分の将来に直接役に立つことがあるのかは分からない。しかし、今回のイベントで必ずしも真っ直ぐな経歴を持たなくても良いのだと少し気が楽になった。まだ将来のビジョンがはっきりしない中で、まずは自分の興味のあることにたくさん挑戦して自分の将来を決めていけたらと思う。将来は、自分のこれまでやってきたことをごくわずかでも日常的に活かせるように努力していきたい。

## 2-2 活動記録

### JICA 二本松青年海外協力隊訓練所見学ツアー記録

日時：2月16日 13:30～14:10

面会者：JICA 二本松職員 永井涼氏、湯澤千里氏

内容：コースは以下の順序で行われた

(食堂→宿泊棟→体育館→大浴場→図書室→研修棟→講堂→広報展示室)

写真：



震災後、電気が通っていたこの施設に避難したお年寄りが少しでもリラックスできるように寄贈されたマッサージチェアがある。



図書室の共通のパソコンの中にはデータベースがあり、全国の先輩隊員の報告書を読むことが出来る。現地に赴いた隊員自身がまとめた各国を紹介する雑誌も収められており、内容は濃くユニーク。



研修棟は1階が英語、2階がその他13言語の教室に分かれている。各国語で書かれた注意ポスターが貼られている。

(文責：大山 理穂)

### JICA 二本松青年海外協力隊訓練所所長講座

日時：2月16日 14:15～14:40

面会者：JICA 二本松所長 洲崎毅浩氏

内容：

内容は大きく2つに分かれていた。初めに「国際協力」が日本や世界にどのように必要とされているかを説明し、次に所長ご自身や息子さんの経歴を例に、具体的にどのように「国際協力」していくべきなのか、またその心構えについて話された。

人口問題が深刻化した日本ではロボットや機械技術の導入や移民受け入れ、小さい政府にしていくことでこの問題を解決させようとしているが、所長は「これはもう日本だけで解決できるテーマではない」としている。アメリカのトランプ大統領の“America First”発言も引き合いにだし、しかしグローバル化が進む今、このような「一国平和主義」は通用しない、世界の中の日本という視点が必要だとした。また、人口問題だけでなく環境問題・食糧問題・保健医療・治安維持など解決しなければいけない問題は山積みであり、世界的に取り組まなければいけないと訴えた。

後半では協力隊になりうる資格、能力、現場での心構えが話題になった。「マラリア患者を回復させるために何が必要か」を例に、「国際協力」の実際の活動する中身を見てみると専門知識がなくてもできることはたくさんあるということを説明した。協力隊には青年部という専門技術が必要条件ではない部もあるし、実際任務にあたる場合専門知識以外が活用されることも多い。大切なのは物事への好奇心やワクワク感を持つことや状況を前もってできる限りシミュレーションする想像力であり、状況を分析し与えられた環境を最大限利用すべきだと説いた。

(文責:大山 理穂)

## 青年海外協力隊経験者による講座 (1)

日時：2月16日 14:55～15:40

面会者：年野明美氏 (インドネシアへ保健師として派遣)

内容：

2014年8月から2016年8月までの間、インドネシアの南スラウェシ州ワジョ県に保健師として派遣された。年野さんの青年海外協力隊への応募動機は日本で培った地域診断のスキルを海外でも生かしたいということであった。現地では地域看護の発展を課題としてワジョ県の衛生局に就任する。実際の現地の状況は、地域看護プログラムの位置づけが低く、担当者の理解度も低く情報共有や学びの場もまだまだ少ないということが見受けられた。そこで、年野さんが立てた目標は「実践を通して、地域活動を定着・活性化させる」ということである。そして、この目標を達成するための計画が3つあった。1つ目は、ワジョ県のあらゆる保健所へ赴き、現状把握をすることである。2つ目は、活動を支援していくということである。ワジャ県では地域診断は実施することまでしかやっておらず、年野さんは診断結果を元にして作成する報告に重点を置こうとした。そうすることで、今後地域診断が有

効に活かされていくという形を作り出す支援を行った。3つ目は地域看護活動の必要性の理解を保つことである。具体的には自宅に訪問して、現地の人の健康管理にも尽力したり、年野さん自身が提案して、地域看護についての講座を開いたりした。また、ホームステイや現地の人との交流の中でもワジョ県で多発する病気の原因がみつけるなどの地域看護に繋がることを見出した。例えば、衛生管理に徹底した環境というものがあまりなく、現地の人は排泄物をするための場所をきちんと設けていないことが多い。また、川にゴミを捨てる人も多いため、これらの結果として感染症にかかりやすくなる。食事に関しても、偏った栄養バランスや塩分の高い食事内容が多いことから栄養失調や高血圧につながることになる。ワジョ県で高血圧、栄養失調、感染症の患者が多かったことが現地の生活に結びついている。そこで、ホームステイ先やあらゆる場所で生活習慣の改善を求めた。しかし、その際に改善すべき点を全て言及にするのではなく、現地の人の考えも尊重した上で現地の人に言うべき改善点を伝えた。

年野さんの重要視していたことは信頼関係であった。仕事場における現地の人の仕事仲間との信頼関係をうまく築いていくことが重要となり、仕事仲間の自分への理解があるからこそ計画内容を円滑に進めることができる。そういったことも仕事をする上で大切になっていると私たちに伝えていた。

(文責：西村 優花)

## 青年海外協力隊経験者による講座 (2)

日時：2月16日 15:45～16:30

面会者：中山直樹氏 (ガーナへ青少年活動として派遣)

内容：

2014年10月～2016年10月までの間、ガーナへ理科やICT教育の指導のために派遣された。活動内容は授業の質の改善と教員の指導力強化をすることであった。派遣後、現地の学校で見受けられた問題点が3点ある。1点目は教員の不在・早退が当たり前である点である。2点目は体罰がありふれた光景となっている点である。3点目はICTと理科の授業において、黒板とチョークのみで行われているという点である。これらの改善に向けて、まず教員の不在・早退に対して中山さんが練った解決法は彼らの生活スタイルや考え方に注目した。そうすることでイスラム教と私生活との結びつきの多さを理解し、彼らの生活スタイルであると認識した。また、日本人にとって仕事は非常に重要視するが、ガーナ人には仕事への執着度が日本よりも低い。これらの国民性からも考えて中山さんは彼らの生活を尊重し、何も言及しなかった。次にガーナの学校における体罰の問題である。体罰問題をどう対処していくのかということ中山さんは聴講者に疑問を投げかけ、周りの人と考えるように伝えた。結果として、あがった意見は体罰の際に使う棒をけがしない柔

らかいものにする、ほめて伸ばす方法を有効的に使わせるというものであった。また、私のグループの話し合いでは、中国では体罰が悪いと考えられていないため、存在していたと留学生から教えてもらい、ガーナでもそうなっているのではないかと思われた。中山さんは GES の WKSP というものに着眼し、できるだけ体罰がなくなるように活動を広げた。しかし、現地では体罰が厳しい学校ほど指導が行き届きやすいことから、迅速に体罰を廃止しなければならない状況ではなかった。最後に黒板とチョークのみで行われる授業についての改善例を先程と同様に周囲の人と考えた。理科の方は多くのグループが野外実習のようなことをやる、実験を取り入れるというような提案があがっていたが、ICT に関しては難しく、あまり意見があがらなかった。中山さんは理科の実験をやる授業を新たに設け、ICT はうまく活用できていないパソコンが多いことから設備を整えることに力を注いだ。

中山さんのこれらの経験から私たちに伝えたいメッセージは、知りたいことのおおよそ半分はネットや本でわかることであるが、もう半分は現地に行ってみないとわからないことであるということであった。

(文責：西村 優花)

### 青年海外協力隊経験者による講座 (3)

日時：2月16日 16:35~17:05

面会者：永井涼氏 (現 JICA 二本松職員、青年海外協力隊経験者)

内容：

ここでは、永井涼氏が 2016 年 8 月にガーナ、11 月にマラウイで JOCV9 名の活動現場を撮影したビデオを拝見させていただいた。派遣前の訓練生のお話や、派遣が終了してすでに帰国している青年海外協力隊の方のお話を伺うことができる中、実際に今派遣中の協力隊員の様子も是非見てほしいとのことであった。また、ビデオを上映しながら、今の派遣隊員がどのような要請内容の元で、具体的にどういった活動をしているのかを丁寧に説明して下さった。

ガーナで感染症やエイズの感染予防法を子どもたちに教える活動を行っている隊員や、野球を子供たちと一緒にプレーすることで心身の発達を促す隊員、また、パイナップルなどの農作物の栽培に携わり、現地の産業の発展を目指す隊員など、様々な面から国際協力が行われていることが分かった。この他にも、マラウイでは、主要科目以外の音楽や体育、図工などの、専門的知識をもつ指導者が不足している教科を小学生に教えたり、エコサントイレという水を節約できるトイレを開発し、現地の人々が水の維持管理を自分たちでできるように手助けをしたり、看護師や薬剤師が、現地の薬局などにおいて薬品の整理整頓を促して、活動の時間短縮や効率化、そして保管状況の適正化に努めている。

以上のことから、JICA では現在も多種多様な国際協力が進行中であることが分かる。また反対に言えば、我々の協力を必要としている人や場所が様々なところにあることを意味している。永井氏もおっしゃっていたが、特定の資格がなくとも誰かのために活動することは誰にでも可能である。しかし、ただ、誰かのために活動しようという強い「行動力」が必要なのだ。

(文責：馬淵 友理)

## 派遣前訓練生との夕食交流会記録

日時：2月16日 18:00~18:50

面会者：青年海外協力隊訓練生

内容：

この会では、我々が派遣前の訓練生と一緒に夕食を食べ、その間に訓練生のお話を伺うというものであった。この会では、筆者は6名の訓練生のお話を伺うことができた。保健師として現地の健康水準の向上を目指しに行く方、JICA に来る前に勤務していた会社で学んだマーケティングを現地へ実践しに行く方、現在勤務している会社で選抜されて、1年間 JICA の訓練生として派遣される方、結婚をして早々に海外にコミュニティ開発をしに行く方、これまでの経験を生かして現地の障害者のサポートをしに行かれる方、手工芸を教えることで現地の方が自分でお金を稼げるようにしたいと考えている方など、様々な背景と目標をもった方のお話を伺うことができた。

JICA の訓練生になるために、勤務していた会社を退社したという方が多かったため、その行為に大きな不安や覚悟はなかったかどうかを伺ってみた。すると、予想外に潔く会社を辞めている人が多かった。例えば保健師としてアフリカに行かれる方は、「保健師の仕事をしていた、日本はもう健康を保つための基盤ができてから、今の自分の仕事は日本には必要ないのではないかと思った。日本ではなくて、健康を保つ生活基盤が成り立っていない発展途上国に自分は行くべきだと思い、会社を辞めて JICA の訓練生になろうと決めた」とおっしゃっていた。この話を聞いて、彼女の思いに共感しながらも、決断力の強さに驚いた。

彼女のほかにも、「自分はきっとほかの場所で必要とされているはずだ」と判断して、JICA の訓練生になったという人がたくさんいた。自分の力を発揮すべき場所を考え、現地に出向いてそれを実行しようと試みる熱意に、強く胸を打たれた。きっと、こういう人たちの力が、国境を越えて世界の希望につながるのであろう。

(文責：馬淵 友理)

## 派遣前訓練生とのディスカッション記録

日時：2月16日 19：10～20：10

面会者：青年海外協力隊訓練生

内容：

ディスカッションには、20名以上の訓練生が参加してくださった。訓練生は2、3人1組に分かれ、私たちは麗澤大、立命館大と合同で、話を聞きたい訓練生の元に行き質問を行った。私が話を聞いた、数学教師の要請でケニアに派遣される方は、もともとは社会科の教師として日本の中学校に勤務していた。しかし宗教や文化の相異により海外で社会科を教えることは難しいため、小学校の教員免許も持っていることも活かし数学教師として応募した。退職の際には覚悟を決めたが、自分の考えややりたいことを尊重して行った決断で後悔はないという。

一番印象に残っているのは、訓練生の方々が皆日々の訓練が楽しいと言っていたことだった。訓練中は毎日授業があり、覚えることも多くかなり大変ではある。しかし、社会人になってからは日々アウトプットばかりの生活であったため、新しく様々なことを学んでインプットすることは自己の成長を感じるそうだ。「ずっと苦手だった英語の学習が初めて楽しいと思えた」という方もいた。また、自分の将来の相談もした。私は国際協力などに関心があるため、過去にボランティアツアーのようなものに参加したり、国際協力に関する授業も受講したりしていた。しかし私は国際協力には全く関係のない数学科に所属しており、それに関しては専門的知識を持っていないことが不利なことだと感じていた。自分の学科は将来仕事に活かすということが難しいこともあり、将来のビジョンを描くことがなかなかできないでいた。しかし、訓練生の方々は、数学科所属というのは珍しく皆に興味を持ってもらうことができるため、逆に長所にも成り得ると言ってくれた。確かに将来像は描きにくい、人生は真っ直ぐにはいかないからやりたいことを一つに絞る必要はない。学科の勉強もしっかりしつつ、学科に縛られず自由に興味のあることに挑戦することも大事なのだと知ることができた。

(文責：森島 佑美)

## グループ・ミーティング記録

日時：2月17日（金）9：00～9：50

内容：

グループ・ミーティングでは、2グループ（張、馬淵、楠原組と大山、西村、森島組）に分かれ、「派遣前訓練生とのふれあいにより感じたこと」「JICA ボランティア経験者の話で

得たこと」などについて振り返りを行った。その後、グループごとに話し合ったことを発表した。

話し合いでは、派遣前の訓練生や経験者など支援側の意識の高さと、支援への熱意や支援目的の明確さに感銘を受けたという声が多く挙げられた。青年海外協力隊に志望した理由は多種多様で、ボランティア活動に以前から興味があった方もいればたまたま会社で応募があったから、自分の人生を変えたいから、世界の現状を実際に見てみたいからなどの理由で応募した方もいた。経歴も多様であり、決してボランティア一筋でない経歴の訓練生も、皆同じように派遣国での活動に向けて熱心かつ前向きに取り組んでいた。また、社会人になると視野が狭くなる中で、協力隊として活動していくために退職など人生を大きく変える決断をし、これまでに培ってきた知識を活かそうと行動しており、行動力と意識の高さを感じた。

JICA に対して持っていた印象が変わったという声も挙がった。前述したように参加動機が多様であることや、ボランティアの要請の種類が豊富で必ずしも専門性や資格が必要ではないことがわかった。中には派遣される要請が決まってから初めてその分野について学習を始めた方もおり、たとえ資格を持っていなくても自分ができそうなことに応募すればよいのだと、ボランティアが自分により近いものになった気がした。

途上国で支援を行う上で重要なこともいくつか学習した。まず、支援側は自発的に分析・企画を行うことが大切である。働く環境が整っていないことを派遣されてから知ること多いらしく、現地での仕事は人から与えられるものではない。しかしそれは自分で好きなように支援の方向を決められるということでもある。それには自分から働きかけて相手との関係を作り、現地で足りないこと・困っていることを一つ一つ細かいところから解決していくことが不可欠である。主体的に物事を進めることも目的の一つとして、訓練所では訓練生が自主的に講義やワークショップを行っていた。また、現地の人々を主体とし、相手の文化に敬意を払って活動に臨むことも重要だと感じた。日本とは全く異なる文化の人々に自分たちの意見を押し付けるのではなく、現地の人とのかかわりを通して人々の意見を柔軟に取り入れ、現地の人々にあった支援方法を考えていかななくてはならないのだとわかった。加えてガーナでの野球支援や、経験者の中山さんが行ったガーナの子供に夢を与える活動に見られるような、人間的な育成も重視している点が強く印象に残ったという意見もあった。

最後に原先生が総括を行った。日本では社会に疑問を持つということが次第に少なくなっていく。その中で社会に疑問を持つことは素敵なことである。訓練生や経験者と実際に話してみると、非常に接しやすかったり、話を熱心に聞いてくれたりという印象を皆感じたはず。差別的・区別的な言動は全くなく、個人を尊重してくれる態度は当たり前でも難しく、支援の上でも大切な姿勢である。

(文責：森島 佑美)

## NPO 法人コーヒータイム訪問記録

日時：2月17日（金）10：30～12：30

面会者：橋本由利子氏（NPO 法人コーヒータイム理事長）

内容：

二本松市市民交流センターにて橋本さんに「NPO 法人コーヒータイムの活動について」の講義をしていただいた後、車で作業所である若宮事務所まで移動し、実際の作業の様子等を見学した。

[講座]

コーヒータイムは2006年福島県双葉郡浪江町に設立された、精神疾患をもつ人たちを対象に、社会に関わっていく最初の入り口として就労支援を行う社会福祉施設であり、現在は二本松市を拠点に活動されている。

浪江町にあった頃は、隣に「老人憩いの家」という施設があったこともあり、お年寄りと一緒に花見や芋煮会などの行事を楽しむなど、毎日人でにぎわう地域密着型の施設であった。2011年3月11日の東日本大震災によって被災し、その年の10月、二本松市で再オープンした。震災当初は7名の利用者と3名の職員がコーヒータイムにいたが、なんとか利用者を自宅に送り届けたという。3月12日の早朝に避難勧告が出たため、8月頃から仮設に移るまで旅館やペンション、体育館などで各々避難した。再オープン時には、職員5名中4名が職場に戻った。2016年7月までは金色事務所で浪江焼そばのソース詰めの作業等をされていた。橋本さんによれば、浪江町が避難解除になっても、事務所を運営していくにあたって一定数の利用者さんの確保が必要である上に、法律でも制限があるため、今後も二本松を拠点に活動することには変わらない。震災によって家族がバラバラになってしまったことは大きな悲しみの一つである。

利用者さんには月12,000円の工賃が支給されていて、作業場で作業する人や喫茶店で働く人がいる。職員は、利用者さんのハイと鬱の病の波が、できるだけ小さくなるよう支援している。精神疾患の場合はストレスに弱いこともあり、会社全体がその人のことを理解する必要があるが、就職はなかなか厳しい現状にある。卒業生はこれまでで2名で、卒業後も連絡を取っているそうだ。長く続くコツは誰かにつながっていること！と橋本さんはおっしゃった。

[作業所見学]

若宮事務所はNTTドコモのビルの上階一角にあり、部屋に入ると新しい木の香りがして、温かみを感じられるアットホームな空間であった。事務所内には利用者さんと職員がゆっくりお話できる場所や、ソファのある休憩所、台所も設けられていた。見学時は6名の利用者さんが作業されており、2～3名の職員の方が利用者さんの作業をサポートするという形態であった。作業内容は、ボールペンの糸巻き作業や紙を袋に入れる作業、お昼のお味噌汁

を作る給仕当番等である。利用者さんの年齢層は幅広く、若い女性とお年寄りの男性が同じ空間で作業されていた。

(文責：楠原 佳奈)

### 3. 資料



## イベント終了後参加学生アンケート集計結果

イベント終了後に、参加学生を対象に、イベント参加の経緯や満足度、関心分野についてアンケートを配布し集計を行った。

本イベントを知った経緯としては、ポスター等の掲示が最も多く、大学関連部署や教員などからの直接の誘い、メーリングリストでイベントを知ったことがわかる。本イベントに参加した動機としては、「国際協力に関心があるから」が最も高く、次いで、「東日本大震災関連の NPO のお話が聞きたいから」「福島県に行ってみたいから」が多く、国際協力ボランティアのみならず、東日本大震災にかかわるボランティアにも関心が高かったことが分かる。本イベントの満足度、開催時期・場所について、参加者全員が大変満足と満足度の高いものであったことがわかる。本イベントで役に立った内容としては、参加者全員が訓練生との交流は役に立ったと回答し、NPO 法人コーヒータイムの講座・見学も 5 人が役に立ったと回答している。講義や交流を通じ、現地、現場のニーズを理解して活動することの難しさや課題を具体的に理解することが出来たようだ。関心分野としては、国際協力全般が最も高く 5 人、東日本大震災からの復興・ボランティアが次いで 3 人、国際ボランティアが 2 人だった。その他として、インフラ整備が挙げられた。

本イベントをどのように知りましたか（複数回答可）	計
学内メーリングリスト	1
ポスター等の掲示	4
大学の HP	1
大学関連部署・センター・担当教員などからの直接の誘い	1
友人・サークル仲間等の誘いまたは SNS 情報	0
その他	0

本イベントに参加した理由は何ですか（複数回答可）	計
国際協力に関心があるから。	5
国際協力に参加したいから。	3
JICA ボランティアに関心があるから。	2
東日本大震災関連 NPO のお話を聞きたいから。	4
JICA 二本松訓練所に行ってみたいから。	1
福島県に行ってみたいから。	4

本イベントの参加満足度は	計
大変満足	6
ほぼ満足	0

あまり満足でない	0
改善してほしい	0

本イベントの開催場所・時期について教えてください	計
大変満足	6
ほぼ満足	0
あまり満足でない	0
改善してほしい	0

本イベントのどの部分が役に立ちましたか	計
JICA 講座「JICA 事業/JICA ボランティア事業概要」	1
JICA 講座「ボランティア経験者によるプレゼンテーションとディスカッション」	4
派遣前の訓練生との交流	6
グループ・ミーティング	1
NPO コーヒータイム講座・見学	5
その他	0

関心分野	計
国際協力全般	5
国際ボランティア	2
東日本大震災からの復興・ボランティア	3
開発途上国に関わること	1
その他	0

## 写真



JICA 二本松洲崎所長による講座



青年海外協力隊 0V (年野明美氏) による講座



青年海外協力隊 0V (中山直樹氏) による講座



訓練生との夕食交流会



訓練生とのディスカッション



訓練体験参加「朝の集い」



NPO 法人コーヒータイム橋本理事長によるお話



NPO 法人コーヒータイム喫茶店



---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」実施報告書

2017年3月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel&Fax : 03-5978-5546

Email : info-cwed@cc.ocha.ac.jp

